









意想外史編

新詩的俗謠

發行所

言文社
東西社

序

人の感情より發りて、聲に調あり調に節ある之を詩若くは歌といふ。詩に種々の形式あり。古來我國に傳はり存するものゝみにても其類極めて多し。長歌の長さよりして、俳句、川柳の短きに至るまで、數へ來れば寧ろ其煩に堪へざらん。今、開が中にて最も廣く民俗間に行はるゝものを求むれば、俚謠若くは俗謠の稱を以て呼ぶべき二十六字詩なり。是れ何れの時代に其詩形を成し得たるものなるか、今之を明かにする能

はずと雖、貞享、元祿の頃、廣く三都に流行せる投節に至りて、大に其面目を發揮せるものあるを認め得べし。其他普く全國各地に古くより行れ來りし白引歌、田植歌、盆踊歌の類も多くは此詩形に屬するを見る

投節の優麗典雅なる一唱して眞に三嘆を價するものあり。白引歌、田植歌、盆踊歌等の純樸素野なる情趣なか／＼に深くして酌めども盡きざるものあり。而して近く潮來節なるものも起りて濃厚艶麗を極むるよりして風尙稍劣るに至りしが、之

に次で彼の都々一坊扇歌が盛んに唱へ出し、呼ぶに都々一の名を以てするに及びて、淫靡卑猥聞くに堪へざるものとなり、遂には君士人の指彈する所となりて、専ら絃妓の間にのみ行はるゝに至りしは此の詩形の爲に轉た浩歎すべきなり。今にして之が弊を救ふにあらざれば其趣く所遂に那邊に到るやも未だ以て知る可らず、是れ吾人が茲に本書を編纂せんと欲する微意の存する所なりとす

夫れ俗謠は一種の平民詩にして、依て以て時代の風尙と民俗

序 文

の趨向とを知るに足る。詩としての價值、豈其他のものに譲らんや。況んや俗謠の特長は之に曲節づけて自由に謠はれ得る至大の便宜を有するに於てをや。特に本書は、意を専ら其詩的價值と聲調美とに注ぎたれば、從來のものに比して大に其趣きを異にするものあり。些少なからも俗謠の本質を明かにして、平民文學に資するものあらば、編者の希望は之を以て足れりとせん

明治乙巳歲八月末の一日

編 者

凡 例

- 一、本書は之を編纂するに方りて、重きを其の詩的價值と聲調美とに致し、努めて淫靡卑猥聞くに堪へざるものを避けたり
- 一、本書は材を採るに、主として、投節、潮來節、磯節、白引歌、田植歌、盆踊歌等よりし、明治現代中のものを以ては僅かに之を補ひたるに過ぎず、故に作者氏名の明かなるもの極めて少ければ、其の体裁の一ならんを欲して悉く之を省きたり
- 一、本書は俳句の分類法に倣ひて、春夏秋冬及び無季の五部に大別し、更に之を類別小分したり。是れ從來此の類の書に多く其の例を見ざる所にして、編者

凡 例

凡 例

が最初期せし程の成功をば遂に見る能はざりき

一、本書は俗謠普通の詩形即ち二十六字式のもの、之に五字を冠らしめたる三十一字式のものより成り、字餘、詩人、文句入等は凡て之を省く。是れ此等のものには詩的價値を有するもの殆んど絶無なりしが爲なり

一、本書は端唄中の最も艷麗雅美なるものを抜き取りて隨所に之を挿入したり。是れ新式のカットとして代用せるもの、讀者の目先を新にせんとてなり

一、本書は附するに俗謠研究の葉を以てし、之が起原、變遷、分類、作法、批評等の概要を述べたり

新 詩 的 俗 謠 選

目 次 春 の 部

春の雪 春の雨 春の風 春の月 霞の月 汐干狩 茶摘鳥 黄鳥

一 玄鳥 二 雛子 四 歸雁 五 蛙 七 蝶 七 梅 七 櫻 八 躑躅

九 柳花 九 藤の花 一〇 山吹 一〇 茅花 一 蘆花 一 草花 一 雜

一八 一八 二一 二二 二二 二二 二三 二三

詩 的 俗 謠

秋 露 砧 鹿 雁 歸 秋
の 夜
冬 月 雨 時 霜 霰

目次

四八 四九 五一 五二 五二 五三 五三
秋 虫 松 蠶 紅 萩 女
の 虫 虫 斯 棄 郎 花
蝶

五三 五四 五五 五五 五六 五七 五八
朝 薄 菊 番 淺 雜
顔 椒 茅

五九 六一 六一 六一 六一 六一 七一
七〇 七〇 七一 七一 七一 七一

詩 的 俗 謠

五 月 雨 夏 夏 清 田 簾 風
の 雨 月 水 植 鈴

秋

夏

の

の

部
四一 秋 風

四七 霧

四八

二五 二六 二六 二七 二七 二八 二八
蚊 蚊 老 時 水 螢 蚊
遣 帳 鶯 鳥 鷄

二九 二九 三〇 三〇 三三 三三 三三 三七
卯 茨 撫 杜 百 菖 雜
花 花 子 若 合 蒲

三七 三七 三八 三八 三九 三九 四〇

詩 俗 的 謠

風 雲 水 月 夜 明 海 山 船 鐘 名 人
日 方 所 名

無 季 の 部

自 次

七三 七四 七四 七五 七五 七六 七六 七七 七八 七九 八一 八七
人 心 思 殿 戀 夢 火 淚 別 命 髮 寫
眞

八九 九〇 九一 九四 九五 九七 九八 九九 一〇〇 一〇一 一〇二
寢 旅 移 文 絲 鳥 松 竹 花 草 滑 雜
顔 香 稽

一〇二 一〇二 一〇三 一〇三 一〇四 一〇五 一〇七 一〇八 一〇八 一〇〇 一一一 一一一

詩 俗 的 謠

新 詩 的 俗 謠

意 想 外 史 編

春 の 部

春 の 雪

春よ垣根の雪にはあらで、消えぬかぎりの下思
春の淡雪はかない世にも、消えぬ譽の大和武士

春 の 部

春の部

春の雨

雨あめの降ふる夜よは一入床ひとしほゆかし、いつにおるかばなけれども
 よるべなき身みは夢ゆめこそたのため、うつな妻つま戸どを夜よるの雨あめ
 二人ふたりならんだあひく傘かさを、雨あめものぞくか横よこに降ふる
 心こころツクシに袴はかまをとらせ、濡ぬれるよめ菜なやはるの雨あめ
 雨あめは降ふるとも身みは濡ぬりやせまい、サマの情なさけを笠かさにきて
 春雨はるさめに、口説途切くぜつとぎれて只ただくよくくと、泣ないて居ゐるのを寢ねた振ふりに、寄よ
 術すべも無なき女氣をんなぎを、癩しかくが取り持もつ仲直なかぢり

春の部

雨あめの降ふ出でになが立初たちぢて、雨あめはやめども名なはやまぬ
 待夜まちよさびしくアレ意地いぢわるな、心迷こころまよはずあめの音おと
 海老茶袴えびちやばかまと眼鏡めがねが土手どてを、言いはずかたらず春はるの雨あめ
 雨あめに舟ふねよぶ柳やなぎの渡わたし、濡ぬれてうれしいもやひがさ
 春雨はるさめに、しつぽり濡ぬるゝ驚うつくしの、羽風はかせに匂におふ梅うめが香かや、花はなに戯たはむ
 れしをらしや、小鳥こどりでさへも一筋ひとすぢに、塘定ねぐらさためん木きは一つ、わた
 しや驚うつくしぬしは梅うめ、やがて身みまゝ氣きまゝになるならば、驚あうしゆくばい宿梅しゆくばいで
 はないかいな、サツサ何なんてもよいわいな。

春の部

春の風

吹くか春風時節が来れば、去年の枝にも花が咲く
 花を咲かせてまた散らすとは、心ないぞへ春の風
 梅にからまる柳のいとを、解きに来たのか春の風
 解いて結んでやなぎの糸を、ジラス心か春のかぜ
 花を散らしつ柳を解いつ、といつちらしつ春の風
 しばしもつるゝ柳の糸の、とけて怨みもはるの風
 袖の移り香まだしら梅を、来てはショク春の風

春の部

春の月

清き流れに散り込む花の、なかをとりもつ春の風
 花がちらく二ひら三ひら、窓に散り来る春の風
 早蕨の、握拳に、罪とがもない、山の笑顔を春の風
 包む霞にひかりもうすく、何處か冴えない春の月
 花の曇りは雨にもならで、傘をはなさぬおぼろ月
 楫を枕にうさ寝の夢も、かすむおぼろのつきの影
 胸の鏡は今宵の月よ、うれしい逢ふ瀬も梅のかげ

春の部

朧月夜おぼろつきよにアレにくらしい、ひとりくの二人ふたりづれ
 追おうて恥はづかしアレ人ひとちがひ、朧月夜おぼろつきよのにくらしや
 問とへど返事へんじも朧おぼろなぬしは、何處どこへ意氣地いさぢを春はるの月つき
 用ようはなけれど何なにとはなしに、出でて見みたいぞや朧月おぼろつき
 てらずくもらず春はるの夜よそゞろ、面おもしろいぞや朧月おぼろつき
 青柳あをやぎの、糸いとの縛もつれがサラリと解とけて、嬉うれしさうだよ月つきの影かげ
 月影つきかげに、うつる姿すがたの、エ、憎にくらしい朧おぼろかけ、鬢びんかき撫なでて
 物思ものおもひ、かうもやつる、ものかいな

霞

高たかい山やまには霞かすみがかゝる、わしは其方そなたに眼めがかゝる
 沖おきをはるかに出でてゆく船ふねを、憎にくくや霞かすみが隠かくすかや

沙 干 狩

足あしのあとまでならんで嬉うれし、主ぬしとつれ立たつ沙干しばひ狩かり

茶 摘

アレに見みゆるは茶摘ちやつみぢやないか、茜あかね襷たすきに菅すけのかさ
 笠かさは菅すけがさ襷たすきはあかね、ちやつみ女をんなのしをらしや

春の部

春の部

黄鳥

春の黄鳥何をさして寝やる、はなを枕に葉をかけて

一夜明ればまた氣も變る、花の盛りは梅屋敷、初音一聲鶯のほう法華けふの約束は、實にうれしいぢやないかいな

香に迷ふ、梅が軒端の匂鳥、花に逢瀬をまつとせの、あけて嬉しき懸想文、開く初音も耻かしく、まだ解けかぬる薄氷、雪に思へば深草の、百夜も通ふ戀の闇、君が情の假寝の床よ、枕かたしく終夜

玄鳥

まねく柳のなさけの露に、濡れて飛び出す朝つばめ
まねく柳にうしろを見せて、くらいところへ来る燕
あひく傘した二人がなかを、ぬける燕が憎らしい
濡乙鳥門を幾度も通るは無事な、顔を見せにか見に来たか

雉子

雉子の雌鳥すゝきの下で、妻をたづねてほろゝうつ
雨よ降りやめお寺のわさの、柿の樹蔭に雉子が鳴く

春の部

春の部

歸雁

花をうしろに思ひをのこし、時にせかれて歸る雁
花や霞にひきとめさせて、かへしともない春の雁

蛙

これもさすがに哀れをそふる、小田の蛙の暮の聲
水に蛙のなく聲聞けば、ありしその夜が思はるゝ
池の蛙のひそくばなし、聞いてねる夜の春の雨
井戸の蛙と譏らばそしれ、花も散りこむ月もさす

春の部

蝶

蝶よ胡蝶よ菜葉に泊れ、泊リヤ名が立つ浮名立つ
花が蝶々か蝶々が花か、來てはちらく迷はせる
娘島田に蝶々がとまる、蝶々とまれや花ぢやもの
花にこがれる胡蝶の夢を、にくや風めが來て醒す
花の盛りを訪ひ來る胡蝶、嵐にもまれて遠ざかる
花にうかれて來る蝶々も、風が邪魔する世の習ひ
花の色香にうかく迷ひ、日暮わすれて居る胡蝶

春の部

花をあるじに木の下蔭で、結んで見たいよ蝶の夢
 思案つくづく眺める窓に、フイと舞ひ込む番ひ蝶
 花のにほひに迷ひし蝶も、濡れてうれしい春の雨
 楽しさうだよ彌生の野邊を、追つ追はれつ春の蝶
 花か蝶々かひらくくと、來ては迷はず窓の蝶
 菜種油の燈に來た胡蝶、死ぬる覺悟かしをらしい
 春風に、吹廻されし小蝶さへ、番ひはなれぬ女夫なか、菜の葉に
 契る心根を、風が邪魔して、袖や袂のあやとなる

梅

春の部

しめる障子に面影のこす、閨にうれしき月のうめ
 春の初めと泣かずに別れ、あとでほろりと梅の露
 袖に移りしこの梅が香は、東風の便りか今朝の春
 たまに逢ふのがたがひの花よ、梅も苔は香が薄い
 包む色香も何時しか洩れて、パット浮名の匂ふ梅
 忍ぶ戀路は誰白梅の、色にや出さねど香に洩るゝ
 うつる薫に未練がのこり、立ちも兼ねたる床の梅

春の部

害の梅さへ開けばかをる、かくす戀路も人が知る
年齢は十四で肩すれど、末にヤほころぶ梅の花
私とお前は小簍の小梅、なるもおつるも人しらぬ
黄鳥を、とめてシツボリ樂しむ梅を、ソツト見て居るヤホな月

櫻

面白いぞや今咲く花は、後の散りばは知らねども
親は他國に、子は島原に、さくら花かや散りぐに
月にむら雲をよ吹く風に、そでに櫻がちらくと

春の部

咲いたさくらになぜ駒繫ぐ、駒が勇めば花が散る
花が霞かかすみか花か、言ふに言はれぬ今朝の春
咲いた花なら散ねばならぬ、恨むまいぞへ小夜嵐
咲いた櫻に手は届ども、他所の花なりや見て戻る
心ありげに散り込む花を、のせて棹さすいかだ舟
夜櫻や、浮れ鳥がまいくと、花の木蔭に、誰やらがゐるわいな、とほけさんすな芽ふき柳が、風にもまれてゐるわいな、ふ
うわりと、おしきしうかいな、さうぢいな

春の部

花は折りたし梢は高し、ながめ暮すか木のもとに
 花は一えだ折手は二人、わしはドチラへ靡こやら
 つゝむ霞の袖ほころびて、かをりこぼした峯の花
 風のさそふにほころび初めて、色香ゆかしき櫻花
 櫻咲くかや咲くかや櫻、なかにすみ田のみやこ鳥
 花のくもりか遠山の、雲か花か白雪の、中をそよく吹く春風
 に、浮寝さそふやさなみの、こゝは鷗も都鳥、扇拍子のさ
 んざめく、うちや床しき、うちぞゆかしき

春の部

闇の夜に来て櫻をけづり、赤いこゝろを墨で書く
 花の口もと耻かしさうに、笑ひをふくんだはつ櫻
 ちらす心かアレマアにくい、春の夜中の仇あらし
 春の浮氣についさそはれて、咲くや深山のおそ櫻
 おもふお方と見合ふた顔を、外けりや冷と花吹雪
 散ればこそいと、櫻はめてたいものと、悟りながらもつらい雨
 春雨の、はれて朧に月のさす、すぬな櫻の色よりも、微酔さ
 めの仲の町、一ふさ欲しき花の露

春の部

躑躅

岩間いばまがくれの躑躅つぐじでさへも、もゆる思おもひの色いろに咲さく

柳

何をなになげくぞ川かはばた柳やなぎ、水みづの出でばなをなげくかや
色いろのよいのは出口でぐちの柳やなぎ、殿このにしなへてゆらくと
サマとワシとはうちごみ柳やなぎ、浮うけど沈しづめど諸もろ共に
しだれ柳やなぎに櫻さくらを咲さかせ、梅うめのにほひをもたせたや
梅うめのにほひを櫻さくらにこめて、しだれ柳やなぎに咲さかせたい

春の部

たとへ錦にしきの風かぜふくとも、他所よそへ靡なびくな糸いとやなぎ
緑みどりいろ増ます柳やなぎのもつれ、解とけてさらりと月つきのそば
來くるか來くるかと川かは裾すそ見みれば、河原かはら柳やなぎのおとばかり
何をなにくよく川かはばたやなぎ、水みづの流ながれを見みて暮くらす
橋はしのたもとのアノ糸いとやなぎ、縁みどりしたゝるなよ姿すがた
どうなとしやんせと身みを投な出して、風かぜに委まかせる青柳あおやなぎ
ムツとして、歸かへれば門かどの青柳あおやなぎに、曇くもりし胸むねを春雨はるさめの、また晴はれて
行く月つきの影かげ、ならば朧おぼろにしてほしや

春の部

東風の手管にツイ巻き込まれ、靡さかゝりし糸柳
 主としつぼり今宵の雨に、濡れて色ます糸やなぎ
 君を見かへり柳のえだは、風にもつれて雨にとけ
 またも未練で見返り柳、こゝろ引かるゝうしろ髪
 引よせて、ちつと見つめる柳の芽から、ほろりと翻せし一車
 辻君の、絶えぬ流れの思川、戀にはほそる柳かげ、しばしと
 めたき三日の月、櫛のむねさへ小夜嵐、さらりと解けし洗髪、
 結んで清き水の音

藤の花

山で赤いのが躑躅に椿、咲いてからまる藤のはな
 馬鹿になさるな枯木ぢやとても、藤に捲て花が咲
 すねた梢を手管とやらで、おつにからんだ藤の花

山吹

様と私とは山吹そだち、花は咲けども實はならぬ
 つとめする身に實のあらば、花にみのなる山吹に
 八重の山吹はでは咲けど、未は實のない事計り

春の部

春の部

山吹やまぶきの、花はなのいろ香かに心こころをとめりや、駒こまの手綱たづながツイゆるむ
山吹やまぶきの、色いろに迷まようて浮名うきなはたてど、當座たうざの花はなには實みがならぬ

茅花

野邊のべの茅花つばなも時節じせつが來くれば、人ひとの眼めにつく花はなが咲さく

薊

君きみは野のに咲さく薊あざみの花はなよ、見みればやさしや寄よばさす

草

春はるの若草わかくさ摘つみさらされて、土つちにおもひの根ねを殘のこす

雜

露つゆの思おもひでやうくそたち、色いろに知しられた春はるの草くさ
春はるの草くささへ秋あきには枯かれる、嗟さ峨がの庵いはりのはてを見みな
草くさは刈かれども蝮蛇まむしはかるな、蝮蛇まむし狩かりすりや足あし噛かむ
土手どての草くさ、人ひとに踏ふまれて一度いちどは枯かれて、露つゆのなさけて甦よみがへる

雲くもに入る鳥とりかすみを幾重いくへ、隔へたてながらに聲こゑもらす
花はなと月つきとにツイ誘さそはれて、今宵こよひもうかく二人連ふたりづれ
人ひとがいはますコナタの事ことを、梅うめや櫻さくらのとりくくに

春の部

春の部

梅はにほひよさくらは花よ、人は心にフリいらぬ
 散るは櫻か將た蝶々か、鐘のひびきに、二つ三つ
 花に短冊つけるはよいが、餘所に主ある枝をるな
 思ひ切つてもまたふりかへる、岸に櫻の渡しぶね
 罪も菜の花ふんだり蹴たり、恨めしいぞへ春の駒
 いきな梅が香、あだめく櫻、赤きころの桃のはな
 梅が主なら 柳がわたし、仲のよいのかすれるのか、ある夜ひそ
 かに山の月、心、ないぞへ小夜嵐

夏の部

五月雨

さつき五月雨、涙の雨の、降るにつけてもなほ床し
 さつき雨ほど戀しのばれて、今はあさまの落し水
 降りみ降らずみ五月雨空を、軒に思案のわかき妻
 五月雨の、闇に迷ふも戀路のならひ、いつか晴間をまつ月
 五月雨の、或夜窈に小窓を明りし、そつと出て居る月の顔

夏の部

夏の部

夏の雨

来るかくと待せて置いて、外へそれたか夏の雨
庭にすゞしく湛へた水に、サツト降り来る夏の雨

夏の月

雲のすごみもいつしか消えて、心すゞしい夏の月
胸の曇りもいつしか晴れて、空に涼しい月を見る
粹な夜風に燈火を消させ、ソツト入込む蚊帳の月
月も意地わる蚊帳越しのぞく、耻かし妾の寝た姿

夏の部

清水

みやま清水は底からすむが、君の心もそこからか
夏のたびして深山の清水、笹にむすべば玉ぞ散る

田植

揃たくよ田植新造が揃た、稲の出穂よりよく揃た
田植早乙女揃ひのでたち、聲もほがらに歌のふし
朝顔に、釣瓶とられて物思ひ、人の心と淀の水、はや明近き鳥
羽の船もやひ離れし蕪かつら、聲もやさしき田植歌

夏の部

簾

吹けよ松風、あがれよ簾、いまの小唄のゆし見たや
吹けよ川風、氣もろき舟の、すだれあぐれば筑波山
人目忍んだすだれの中を、野暮な風めがさし覗く
雲の上さへ吹く懸風で、うごきそめたる玉すだれ

風 鈴

軒を吹く風、晝寝の夢が、覺めてすゞしき鈴のおと
風鈴の中に住居し私か心、どうかならうと風を待つ

夏の部

蚊 遣

伽羅をたかせた昔にかへて、今は嵯峨野の夕蚊遣
ひさごくづ屋にかやりをたきて、綾や錦と夕納涼

蚊 帳

涼しあけほの蓮吹く風が、紹蚊帳二人の夢さます
明けの高樓萌黄の蚊帳が、風に波たつゆらくくと
起きて見つけ、寝て見つけ待てど便り無く、蚊張のひろさに只ひとり、
蚊をやく火より胸の火の、もゆる思ひを察しやんせ

夏の部

老 鶯

老の黄鳥一こゑうられし、梅にむかしをしのび泣き
梅の小えだに昔をしのび、啼くやうぐひす老の聲

時 鳥

涙くらべん山ほととぎす、我も浮世のつらければ
空になく音はみならそ鳥よ、ねやのうちこそ時鳥
宵の口説のしらけたあとを、ないてとほるや時鳥
其の曉の一聲は、花川戸より鳴きそめて、土手を八聲や時鳥

夏の部

來ぬ夜あまたの山ほととぎす、降るは村雨我が涙
月のあけぼの此の村雨に、いまはわすれぬ不如歸
蛙なくさへ恨みのあるに、まして寝ざめの勸農鳥
いととさびしき寝ざめのとこに、涙な添へそ時鳥
血を吐く想ひの今宵のわかれ、月も泣いたよ子規
一聲は、月がないたか子規、いつしか白む短夜に、未だ寝も足らぬ
手枕や、男心は凄らしや、女心は然うちやない、片時逢
はればくよくくと、愚痴なこゝろで泣いて居るわいな

夏の部

わきてつらきは山杜鵑、やまはととぎす 聲もかたちもいづこぞや
 見たや逢ひたや山時鳥、やまはしとぎす すがたならねば聲なりと
 月を待つ間の空晴れやらで、つぎ まま そらは わつとなき出す蜀魂
 今か今かと寝られぬ耳に、いま いま 待たぬ一聲ほととぎす
こひ こひ 戀し戀しがつい癪となる、しやく 胸にさしこむ窓の月、むね 今や來るか
ま 待つ身も知らず、み 待たぬ一聲ほととぎす
かきねう 垣根卯の花時鳥、はなはととぎす 一聲ないて聞かまほし、ひとこゑ 音信ないがこぶじふ
 か、おとづれ どうじやいな、か アノナどうじやいな

ひとり山道もの凄じさる、やまみち 早く聲出せほととぎす
 待つにかひなきアノ郭公、はととぎす 雲井へだたる聲ばかり
 たまに逢ふ夜にアレマア憎い、あ 一聲血を吐く杜鵑
 月は更けゆく鐘の音ひくう、つき またも啼くかや時鳥
 五月雨に袖も乾かぬくぜつの中へ、さみ 空で音をなくほととぎす
 小夜更けて、さよ 月を待間のアノ子規、つぎ 逢ひたいみたいと焦なく
とり 鶉の聲、かね 鐘の音さへ身にしみて、み いとゞさびしき闇の内、れや 待身は
 つらきひぢまくら、おも 思はせぶりな時鳥

夏の部

夏の部

水 鷄

たゞく水鷄にまたゞまされて、起きて耻かし我姿
 たゞく水鷄か松吹く風か、更て妻戸をおとづる、
 待つ夜の柴の戸叩くは誰ぞ、主か水鷄か風の音か
 ならば此身が水鷄となつて、思ふ妻戸を叩きたい

螢

思ひ亂れて蘆屋のさとに、海士の焚く火か飛ぶ螢
 燃ゆる想を消さんとするか、野邊の螢の露に寝る

さてもやさしき螢のむしや、しのぶ暇の暗てらす
 可愛らしいよほたるの虫は、忍ぶ暇に火をとぼす
 戀し戀しと鳴く蟬よりも、鳴かぬ螢は身をこがす
 思ひ焦れて野に飛ぶほたる、夕べく身に身を焦す
 月にかくれて暗には晴れて、逢にや螢のもゆる胸
 すむ門邊をゆきかふ螢、月に耻ぢてか見え隠れ
 しげる戀草腐つて化ける、螢も其の身を焦すもの
 後を慕うて追ひ行くものを、知らぬ顔して飛ぶ螢

夏の部

夏の部

露つゆのなさに夜よは引ひかされて、ひとり細道ほそみち行く螢ほたる
 態わざと闇夜やみよを逃にげのびながら、行先ゆくさきあかして飛とぶ螢ほたる
 闇やみに忍しのべばわからぬものを、照てらして人目ひとめにつく螢ほたる
 聲こゑはとどけどアレ憎にくらしい、川かはをへだて、飛とぶ螢ほたる
 雲くもに匿かくれし月つきをば見み上げ、ソツと出でて行ゆくはつ螢ほたる
 雲くもに入る、月つきの油斷ゆたんをコツソリ忌しのび、軒端のきばつたうて來くる螢ほたる
 ものいはて、鳴なかぬ螢ほたるを笑わらふてか、眞まことに心こゝろも闇やみの夜よの、草くさに
 宿やどかる露つゆの身みを、散ちらす嵐あらしの戀こひしらす

蚊

逃にがした蚊やぶかがアレ憎にくらしい、打うつに打うたれぬアノ寢顔ねがほ

卯花

玉川たまがはに、咲さける卯花うのはな岸しらべ白々と、雪ゆきか月夜つきよかちく霜しもか

茨花

刺この中なかにも花はな咲さくばら、知しらず手てを出だしや怪我けがをする
 美うつくしく咲さくアノ茨はらさへも、花はなにかくれた刺とげをもつ
 山やまを通とほれば茨いばらがとめる、茨いばらはなしやれ日ひが暮くれる

夏の部

夏の部

撫子

送る格子に咲く撫子の、花になみだのつゆが散る
露のなさを葉毎にとめて、朝の撫子しをらしや

杜若

清き流れの淺瀬に花の、いろ香貴としかきつばた
水あげかねたる思ひの丈を、文にこましく燕子花
淺くとも、清き流れの燕子花、飛んで往來の編笠を、覗いて來た
か濡れ乙鳥、顔が見度いぢやないかいな

夏の部

百合

様の寢姿今朝こそ見たれ、五月野に咲く百合の花
夏の山道谷間を見やれ、谷間谷間に百合が咲く

菖蒲

我は菖蒲の音にこそ泣かめ、引くな袂の露けさに
潮來出島の眞菰の中で、菖蒲咲くとはしほらしや
よそに思ひし昨日の菖蒲、今日は我家の妻となる
君にうつかりアノ花菖蒲、にくや邪魔する五月雨

夏の部

雜

尻しりに敷しかれる庭むらも時節じせつ、蘭らんさへ花はなさくなつがある
 庭園ていゑんにやり水燈籠みづとうろうの火影はかけ、夏なつの小座敷こざしきつりしのぶ
 きぬくの、別わかれに空そらも雨あめさそふ、蟬せみと螢ほたるを科かりにかけて、泣な
 いて別わかりよか焦こがれてのきよか、ア、昔むかし思おもへば見みず知しらず

色氣いろけないとして苦くにせまいもの、賤しづが伏屋ふせやに月つきがさす、見みわれ茨ばらに
 も花はなが咲さく、田圃たうぼ戻もどりに袖そで襷たす引ひか、今宵こよひ逢あはめづかり、招まねく合あ
 圖づの小室こむろ節ふし、薄うすに殘のこる露つゆの玉たま、かしくと讀よんだが無む理りかいな

秋の部

月

よしや今宵こよひは曇くもらばくもれ、とても涙なみだで見みる月つきを
 住すめば浮世うきよに思おもひ増ますに、月つきと入いらばや山やまの端はに
 月つきは人目ひとめの關路せきじもなしや、西にしにながる、夜半よはの空そら
 よそになしてもとへかし人ひとの、月つきは誰故たれゆゑ袖そでに住すむ
 泣ないて寢顔ねがほのなかばは雲くもに、見みえてこぼる、袖そでの月つき

秋の部

秋の部

恨みながらも又うち向ふ、月はゆかりか憂き人の
 月を見ればやと契りし人も、今宵袖をやしぼるらん
 せめて宿れよ小簾もる月も、日頃もとめし憂き涙
 松の葉ごしの磯邊の月は、千歳経るとも變るまい
 せめて閨もる月影なりと、しばし枕にとまれかし
 逢はでかへれば心の闇よ、月は冴ゆれど道見えず
 残るかたみの鏡にうつる、つきのさをひし面影は
 くるわはなれて罪なき月を、いつか都の空に見ん

秋の部

うさみ浮草しづみもはてぬ、そこの心を月やしる
 月はひさしや閨までさすに、わしが心はしんの闇
 月はさゆれど心はくもる、わしが戀路は闇ぢややら
 風が戸叶きやうついで明けて、月に耻かし我が姿
 月はいみじき闇こそよけれ、しのぶ姿の顔見えず
 月夜うたてや闇ならよかる、待ぬ間に來て門に立
 月は東にすわるは西に、いとしトノゴはまん中に
 明日も來て見な萩おしわけて、野路の玉川波の月

秋の部

月は傾むく夜はしらぐと、話し途切れて眼に涙
 窓の障子に墨繪の竹を、かいたり消したり風の月
 残り惜しさに後見送りて、月を合手にひとりごと
 憂き身うき草沈みも果てぬ、その心を月や知る
 此方思へば黠る日が曇る、冴えた月夜が闇となる
 憂しや心を誰れしら露の、袖にやどるは月ばかり
 夕暮に、詠め見飽かぬ隅田川、月に風情を待乳山、帆掛けた船が
 見ゆるぞへ、アレ鳥が啼く鳥の名の、都に名所が有るわいな

秋の部

身に引きくらべて夫戀ふ鹿の、聲も淋しき寢覺月
 見ゆる此身の影のみ寫す、月より外には訪はぬ軒
 夜毎々々のさびしき闇を、訪ふは雲井の月ばかり
 宿る月さへあはれを添ふる、そでと袖との憂き涙
 或夜ひそかに人目をつゝみ、主を松からしのぶ月
 すめば宿るし濁れば消ゆる、ホんに浮氣な水の月
 うつるものならうつして見たや、月の鏡に主の影
 アレサ御覽よだんくゝあがる、月は御行の松の上

秋の部

顔をチラリと三笠の山に、出でてまばゆき月の眉
 柳隠れのアノ三日月は、凄いはづだよやみあがり
 未練有明見おくる空に、やつれすがたでのこる月
 夢のかけ橋幾瀬も越えて、後の月夜に目をさます
 こんな形状してはづかしらしい、疊一ぱい松の月
 想ひ出します去年の今宵、月がよう似たアノ月に
 枯野ゆかしき隅田堤こゝろも冴ゆる夜半の月、田面にうつる人
 影に、バツと立つたはアノ雁がねの女夫づれ

秋の風

秋の夜風の身にしみくと、猪牙ぢや寒かる隅田川
 しのぶ夜道に氣をくばれとて、後から吹く秋のかぜ
 桐の一葉のおとづれ絶えて、ぬしは小窓にあきの風
 逢ぬ今宵はなくさりとす、いとゞ身にしむ秋の風
 残るあつさの閨の戸洩れて、そつと入り来る秋の風
 風が物いや言づてしヨもの、風は諸國を吹きまはる
 更けてぼんやり主待つ閨に、吹くや秋風身にぞしむ

秋の部

秋の部

霧

なさけないぞや今朝たつ霧は、歸る姿を見せもせぬ

秋の夜

秋は夜長し訪ふ人もなし、明かしかねたる今宵かな
峯のまつ風つま戀ふ鹿の、訪ふやあきの夜庵すまゐ

秋の夜は、ながいものとは眞んまるな、月見る人のこゝろかも、
更けて待てども來ぬ人の、音信るものは鐘ばかり、數ふる指も寝
つ起きつ、わしや照されて居るわいな

露

こゝろくの世の中なれや、花のうてなの露の色
露の玉の緒限りはありと、うつる面影かはるなよ
通ひなれにし朱雀の野邊の、露はものかは我が涙
歸る野道の淺茅にやどる、露にそへたる我なみだ
ひとつ枕に沈みしなかも、憂きは別れの袖のつゆ
扇ならでも身はふるさるゝ、秋の眺めよ露ばかり
わかれ行く秋流石にかなし、袖にかたみの露の玉

秋の部

秋の部

歸し兼ねては捉へし袖に、つらやこぼるゝ朝の露
 夢の昨夕のなみだが今朝は、草の葉に見る露の玉
 露になりたや袂の露に、消えぬうき身のかこち草
 置いた夜露についほだされて、風にまかせた糸薄
 露の光を便りにしのぶ、背戸の草にも置くこゝろ
 君と別れて秋の野行けば、月も泣いてか草のつゆ
 細い道さへ手に手を引いて、濡れる覺悟の萩の露
 白露や、無分別でも草葉がたより、戀の深みの置きどころ

砧

更けて砧の音より聞けば、月に落ちくる我なみだ
 雲の絶間をまれ出る月に、冴えてきてゆるとほ砧
 忍びあふ夜は砧の音も、いつかみだれて月のそら
 うつゝ心にそれかと思ひ、ソツと立ち出りや遠砧
 君來ずば、國へは入らじ柴の戸へ、出でては販り販りては、椽の橋
 場の遠砧、もて來る風の音信に、のぞいて見れば我れより外に
 影ぞなき

秋の部

秋の部

鹿

月も入るさの山の端隠れ、身につまざる、鹿の聲
 紅葉ふみわけ妻こふ鹿の、聲もさびしき秋のくれ
 戀のやみ路はてらさぬ月に、ないて妻こふ峰の鹿
 朝な夕なにおとづるものは、峯のまつ風しかの聲
 儘に逢れる身であるならば、汝もなくまじ峯の鹿

雁

雁が三つ四つみだれて飛ぶは、誰か急ぎの使ぞや

歸燕

文のたよりを待つ雁よりも、歸る燕がいぢらしい

秋の草

秋のほたるの露よりよわき、光りあはれや畔の草

秋の蝶

來てはチラ／＼思はせふりな今日も止らぬ秋の蝶
 花と寝た身を今では夢と、ひとりはかなむ秋の蝶
 花に結びしむかしの夢も、いまはいづこぞ秋の蝶

秋の部

秋の部

虫

人目しのぶの草葉に結ぶ、露の玉虫ねにぞなく
 聲も枯野にないてる虫の、露のなさけに明す夜半
 闇の千草に宿かる虫も、月にこがれてなきあかす
 手摺に凭れて假粧の水を、何處に捨てよか虫の聲
 庭の草葉に虫の音ふけて、軒の燈籠もねむい顔
 忍び足して閨の戸あけて、ソツと立ち聞く虫の聲
 庭にや虫の音外には小砂利、鳴と止とが忍ぶ邪魔

松 虫

秋の夜に、風が持て来るあの虫の聲、焦るゝ我身に染々と

秋の夜風の身にしみくと、誰を松虫音をほそく
 宿のさびしさ主松虫の、鳴くもこゝろの八重葎
 耳をすまして聞いたも幾夜、ぬしを松虫窓のささ
 庭の松虫音をとめてさへ、若や來たかと胸さわぎ

蝻 斯

聲はすれども姿は見えぬ、君は深山のきりりす

秋の部

秋の部

蝻斯鳴くや霜夜の淋しき土手を、ようマアコ、まできやしやんす
きりぐす、胡瓜切られてきて籠の中、親は草葉の蔭でなく

紅葉

紅葉焦るゝ色とは聞けど、末の落葉を誰れか知る
秋が来たやら鹿さへ鳴くに、なぜに紅葉が色附ぬ
浮名立田の山みち行けば、顔に紅葉が散りかゝる
あれ見やしやんせ海晏寺、眞間や立田の高尾でも、及びないぞへ
紅葉狩

萩

みだれ初めにし心がにくひ、仇な夜露にぬれた萩
かへる主をば見送る背戸の、門に小萩の亂れ咲き
忍ぶ夜嵐かくして居ても、眼につく島田の亂れ萩
猪に抱れて寝る萩よりも、勤めする身は尙つらひ
秋のほそみちみだれし萩の、露をこぼすや朝の旅
月の夜に来て鹿さへなくに、人は訪はぬか庵の萩
猪を、抱いて寝るのも時世と時節、泣いてしをるゝ萩の花

秋の部

秋の部

女 郎 花

風かぜのまになびいた葉はにも、涙なみだの露つゆ持もつ女郎花をみなへし
 露つゆの果敢はかなき情なさけに濡ぬれて、風かぜにやもまるゝ女郎花をみなへし
 名なさへ知しれない千草ちぐさの中なかに、獨ひこり目めに立たつ女郎花をみなへし
 仇あだに吹ふきよるいたづら風かぜに、うかと靡なびかぬ女郎花をみなへし
 頼たのむあさ日ひの影かげさへ消きえて、露つゆにしをるゝ女郎花をみなへし
 捨すてた浮世うきよの庵いはりの庭にはへ、誰たれが植うゑたかをみなへし
 いきな莉かかや、あだめく桔梗ききやうをして風情ふぜいな女郎花をみなへし

美うつくしく、咲さいたアノ花はなよくおみなへし、秋あきが來またとて散ちりかゝる

朝 顔

瑠璃るりや淺黄あさぎに咲さく朝顔あさがおも、色いろはかはれど根ねは一ひとつ
 垣かきのあさがほ毎まいあさ咲さいて、末すえの一輪いちりんちさく咲さく
 朝顔あさがおの、からみつく竹引たけひきはなされて、花はながうつむきや露つゆが散ちる
 牽牛花あさがおに、照てらす日影ひかげのつれないとても、明日あすも盛さかりあるわいな
 朝咲あささいて、よつに萎しれる牽牛花あさがおさへも、露つゆに一夜いちやの宿やどを貸かす
 朝咲あささいて、よつにしをるゝ身みを持もちながら垣かきにもたれて思案しあん顔がほ

秋の部

秋の部

薄 (尾花)

不二の裾野のひともと芒、いつか穂に出て亂れあふ
 露の情にツイほだされて、思ひ十寸穂の篠すしき
 亂れ初めにし心のもと、風となじみし花すしき
 あふささるさに亂れて今朝も、尾花隠れに立留る
 招く尾花にフトだまされて、露のなさけのくさ枕
 露は尾花と寝たといふ、尾花は露と寝ぬといふ、アレ寝たといふ
 寝ぬといふ、尾花が穂に出てあらはれた

菊

梅や櫻は七重も八重も、なぜに野菊は一重咲く
 梅も櫻も牡丹もいやよ、わしは返事をさくが好い
 露のなさけの色香にそみて、いつか逢瀬を菊の花

番 椒

美くしい顔して居る癖に、にくい味もつ唐がらし
 見かけばかりにツイ惚込んで、辛いめを見る番椒
 いつの夕に袖振り別れ、もはやあさじも背に餘る

秋の部

秋の部

雜

水の流れも昨日にかはり、さびし小川の暮のあき
 植ゑて三尺穂に出て五尺、さても見事な此早稲は
 今年豊年穂に穂が咲いた、道の小草にはなが咲く
 更けて月漏る埴生の小屋も、聞くや松風なみの音
 其れでなくとも袂をしぼる、降るな今宵は秋の雨
 ぬれぬ先から浮名たつ、すきは露を戀ひ慕ふ二人が仲をいぢわ
 るな、風が邪覽してちらくくと、おちて耻かし月の影

冬 の 部

冬 の 月

人の苦勞も空吹くかぜと、すましきつてる冬の月
 雨戸ほとく主かと明りや、耻かし睨んだ冬の月
 雪にとざされ道なき庵、せめて訪へかし冬のつき
 船の檣柱さびしう照らす、すごいひかりの冬の月
 千里胡沙吹く風さへ絶えて、さびし馬子唄冬の月

冬 の 部

冬の部

時 雨

思おもひつゞけて涙なみだのしぐれ、定めなきこそ浮世うきよなれ
 松まつの時雨しぐれに夢ゆめうちさめて、よその哀あはれが思おもはるゝ
 さんざ時雨しぐれか萱野かよのの雨あめか、音おともせて来て濡ぬれ懸かる
 止やんで居ゐる間に歸かへるとすれば、又またも降ふり出す村時雨むらしぐれ
 時雨しぐれ降ふる、あさちが原はらの夕ゆふぐれに、二ふた聲こゑ三さん聲こゑ雁かりがれの、便たより待ま
 つ身みの憂うれや辛つらや、戀こひの浮橋うきはし中なか絶たえて、道瀬やるせなみだやもつれ髪かみ、いふ
 にいはいれぬ胸むねの中うち、思おもひやつたがよいわいな

霜

今朝けさはことさら寒さむいにつけて、思おもひ遣やるぞへ堤つとの霜しも
 風かぜに亂みだれし木この葉はの上うへに、白しろう置おいたる今朝けさの霜しも
 馬うまもいなく節面ふしおもしろう、馬子まごがわたるよ橋はしの霜しも

霰

霰降あられふるらし外山とやまのかづら、色いろに見みゆるを如何いかせん
 ぬしを松風まつかぜねやの戸こもれて、またも霰あられのたゝく音おと
 雨戸あまどたゝけど明あけない故ゆゑか、飛とんで這入はいつた玉霰たまあられ

冬の部

冬の部

雪

雪の外山のあけぼのつらや、かやが軒ばの鳥の聲
 雨は降り〜雪降るあひだ、しのぶ細路竹たはむ
 ちらり〜と降る雪さへも積り〜て深くなる
 宵にチラリと見初めた雪が、今朝は積つて銀世界
 駒とめて、袖うち拂ふ影もなき、佐野の渡りの雪ならで、アレ儘
 子にも六の花、譬にも言ふ銀世界、是非販るとは人ぢらし、羽
 織隠すも初手のうち、縁や餘程積つたか

冬の部

雪にや留たし飯さにヤ悪し、心二の字の下駄の痕
 これのお背戸のチラ〜雪に、誰が付たか下駄の痕
 合はぬ齒の根を下駄さへ残す、忍ぶ軒端の雪の上
 回る地球にいかりを下し、暫しとめたき今朝の雪
 雪のはだへに氷のやいば、露のいのちの捨てころ
 我物と思へば輕し傘の雪、戀の重荷を肩に掛け、妹許行けば冬
 の夜の、川風寒く千鳥啼く、待つ身につらき沖の石、實に遣る瀬
 がないわいな

冬の部

凝り堅まつては岩より堅い、雪も解ければ唯の水
 辛い勤も苦にやせまいもの、雪の下にも花が咲く
 雪はちら／＼待夜は長し、エ、モじれたい茶腕酒
 雪に添ひ寝のかず／＼積り、重い身となる窓の竹
 風吹いて、道も絶えなん雪の夜半、來ぬがましぞと諦めて、酒
 の合手に轉寝の、積る怨の宵のうち、思遣つたが宜いわいな
 羽織かくして袖ひき止て、何でも今日は行かんすかと言つゝ立て
 櫺子窓障子細めに引あけて、アレ見やしやんせ此雪に

年 忘

愚痴の埃もうは氣の塵も、はらひて互ひに年忘れ
 思ひ出す種またこしらへて、今宵二人が年わすれ

炬 燵

あつい情を蒲團でかくし、人目にこゝろを置炬燵
 思ひ切つては放れて見ても、又も未練で寄る炬燵

鴛 鴦

四方に雲なく朝日は昇る、何をなくやら鴛鴦二つ

冬の部

冬の部

歸花

つゞく日和ひよりについ騙たまされて、うかくさ咲いたか歸花かへりばな
小春日こはるび和よりについさそはれて、咲くやさびしき歸花かへりばな

落葉

花はなの姿すがたも落葉おちばとなりて、見かへりてのない冬木立ふゆこたち
主ぬしが通かよふた此この足形あしがたを、落葉おちばがかくす氣きがにくひ
冬ふゆを來きて見みなふもとの庵いはり、落葉おちばひらく風かぜに舞まふ
山家やまがわびしや來くる人ひとなくて、おち葉嵐はあらしにさわぐ音おと

枯尾花

露つゆにや捨すてられ雨あめには打うたれ、やつれ果はてたる枯尾花かれをばな
露つゆをやどせしむかしは夢ゆめよ、今はやつれし枯尾花かれをばな

雜

消きえぬ心こころのなかばは雲くもに、かよふ嵐あらしをよすがにて
峯みねの嵐あらしか戀こひしき人ひとか、更よけてあま戸どにおとづる、
如何いかに思おもひを笥かけひの水みづも、氷こほりてかよへぬ時ときがある
灰はいに書かいては又またかき消けして、火箸ひばしも寝ねさぬ終夜よもすがら

冬の部

冬の部

舟ぢや寒かるこれ着ておいて、妾が部屋着の此どてら
 雪をかぶつて寝て居る竹を、來ては雀がゆり起す
 冬どさびしき山里なれど、うれし今年の主のそば
 念がとゞいて斯くなるからは、春の氷のうすきはいやと、ねみだ
 れ髪もはづかしく、解けた素顔の夏のふじ、秋の扇と聞くもうし、
 こちやしつぼりと夜の雪、積りくって深くなり、人日しのびし冬
 こもり

無季の部

風

寒や北風冷たやあらし、わしを思はゞ南風が吹け
 寒やきたかぜ可愛や小供、さいの河原で石を積む
 主の心と空吹く風は、どこのいづこでとまるやら
 風よ吹けく木葉を乗て、乗た木葉の落ちぬほど
 背戸の山から吹き來る風の、末は何處の果を吹く

無季の部

無季の部

雲

程は雲井にへだつるとても、心變らないつまでも
我れが思ひはあの浮雲よ、いづこ行方ぞ定めなき
廻り逢、見しや夫共分らぬ内に、主は外して雲隠れ

水

涙こぼして氣を取り直し、瘦はせぬかと水かゞみ
墨と硯は仲よいけれど、水をさしれりや薄くなる
雨霰、雪や氷と隔てゝあれど、落つれば同じ谷の水

無季の部

月日

過る月日は我のみ知りて、かひもなき身を打歎く
歎きなる世も月日を送る、さても命はあるものか
かよふ心は雲井のよその、中とすぎゆく月日かな

夜

闇夜なれども忍ばし忍べ、伽羅の香をしるべにて
君に逢ふ夜は埴生の小屋も、玉の臺にまざるもの
何か斯うかの待夜の所作に、來るか來ぬかの疊算

無季の部

幾夜ねざめの涙の淵瀬、なみのうねく浮まくら
幾夜ふるとも漏さぬ水の、下に通ふやいはねぶみ
いかに隔てし覺東なさぞ、しめて寢夜もあかぬ身の
辛いものだよ馬喰衆の夜路、夜るは轡の音ばかり

明方

最早明方眼を覺さんせ、日々に逢れる身ではなし

海

千代に八千代に御代治まりて、浪も静かに四の海

山

山が高うて彼の家が見えぬ、彼の家可愛や山にくや
餘りつらさに出て山見れば、雲のかゝらぬ山もなし
みやこくとわしつれて来て、こゝがみやこか山中を
高い山から谷ぞで見れば、瓜のはなやらなすびやら
高い山から海の底見れば、鯛やたなごや海老くづや
山家なれどもわが故郷は、柴のいほりもなつかしや
山家々々とあしげにいやる、いろのよい花山に咲く

無季の部

無季の部

船

あまの捨舟すてぶねよるべも知らで、ひとり涙なみだにふししづむ
 色いろに沈しづみて消きえゆくならば、ひきはかへさじ捨小舟すてせうぶね
 舟ふねがつくく、百二十七艘ひやくにじふしちそう、さまがござるがアノ中なかに
 走はしる舟ふねでもまねけばいそへ、よるは心こころのまことから
 舟ふねはドンドと帆はかけて走る、茶屋ちやの娘むすめが出てまねく
 舟ふねは帆はをまく、帆はは真中まんなかに、かあい殿御とのごは帆はのかけに
 人ひとのむすめと新造しんぞうの船ふねは、人ひとが見たがる乗のりたがる

鐘

鳥とりもはらく、夜よもほのくくと、鐘かねも鳴なります寺々てら々に
 鐘かねがなるかよ撞木しゆもくがなるか、鐘かねと撞木しゆもくのあひがなる
 月つきはかたぶく夜よはしんくと、心こころほそさよ後夜ごやの鐘かね
 霧きりが霽はれたか白帆しらほが見みえる、明あけのてらく、鐘かねの聲こゑ
 今いま鳴なるは、たしか上野うへのか浅草あさくさか阿呆あほうが笑わらふとまよふ、かあいか
 あいと引ひきしめて、居ゐつゞけさそふ雨あめの朝あさ、隅田すみだの川風かはかせう浮氣うきはきをつ
 れて、宵よひの口説くせつのさめころ、仲直なかなはりすりや明あけの鐘かね

無季の部

無季の部

泣いて待夜の更けゆく鐘は、明の鐘よりなほつらい
 捨てた此子をまたふところに、抱けと響いた霜のかね
 三更四更の夜もふけわたり、もはや五更か明けの鐘
 更けて聞く夜の鐘の音ひくら、心ぼそさよ旅のそら
 逢ふた夜の、宵は騒ぎでまぎれて居たが、更けてくる程しんしん
 と、もはや時刻を待つうちに、ゴンとついたる鐘の音に、もしへお
 かごが参りました、エ、モウしんきな駕籠やさん、たま〜逢ふ
 のに知りもせて

名所

富士の裾野の一本薄、いつか穂に出てみだれあふ
 雲の帯して空色小袖、華美をするがの富士のやま
 箱根山をばくらしと通り、はなの小田原星づき夜
 箱根八里は馬でも越すが、越すに越されぬ大井川
 いそげ早漕げ、桑名の船頭、やがて熱田の宮につく
 わたしや長良の船頭の娘、船も櫓も漕ぐ櫂も曳く
 伊勢は津で持、津は伊勢で持、尾張名古屋は城で持

無季の部

無季の部

美濃に妻もち尾張に住めば、雨は降らねど寢戀し
 志賀のさゞ波立つともまよよ、霞かくれの舟床し
 たとへ切ても便はさんせ、あれた志賀にも咲く櫻
 幾夜明石のうらこぐ舟も、うかれ焦れて磯へよる
 蟹の小舟の櫓を推して、すまや明石のわび住居
 天の橋立いくのゝ道の、遠いたび路をふみのつて
 心よししく吉野のさくら、あい嬌こぼして御所櫻
 磯は戀しや大洗さまの、松が見えますほのくくと

沖の暗いのに白帆が見える、あれは紀の國蜜柑船
 渡り比べて世の中見れば、阿波の鳴戸に波もなし
 阿波の鳴戸に身は沈むとも、君の事なら背くまい
 さつさ押せく下の關迄も、押せば港が近くなる
 船頭可愛や穩戸の瀬戸で、一丈五尺の櫓がひはる
 安藝の宮島まはれば七里、うらは七うら七ゑびす
 丹波雪國つもらぬさきに、つれてお出やれ薄雪に
 丹波田どころ、良い米どころ、娘遣りたや婿欲しや

無季の部

無季の部

見ましよ見せましよ浦戸を明て、月の名所は桂濱
 面白いぞや木曾路の道は、笠へ木の葉が舞かゝる
 木曾の御嶽さんは、夏でも寒い、袷遺たや足袋添て
 矢並つくるふ那須野の霞、消えてくだけて玉の露
 土佐はよい國南をうけて、薩摩おろしがそよくと
 西は追分、東は關所、せさしよ越ゆれば茶屋の町
 潮來出島の十二の橋を、ゆきつもとどりつ思あん橋
 潮來出てから牛ぼりまでは、雨もふらぬに袖絞る

無季の部

お江戸出てから戸塚はとまり、駒を早めて藤澤へ
 みやこまさりの浅くさ上野、花のはる風音さへる
 こゝは何處ぞと船頭衆に問ば、こゝは梅若墨田川
 いく夜しをれて貴船の河も、そでの涙に玉ぞ散る
 思てかよへば千里が濱も、障子ひとへと思て來る
 來と言れて行れヨか佐渡へ、佐渡は四十五里波の上
 新發田八萬石荒地になろが新瀉通ひはやめられぬ
 新瀉女郎衆は錨か綱か、今朝も出船を二艘とめた

無季の部

關の地藏にふり袖させて、奈良の大佛むこにとろ
 關の三本松、一本さりヤ二本、あとは切れぬ女夫松
 信州信濃の新蕎麥よりも、私やお前のそばがよい
 坂はてるく、鈴鹿はくもる、あひの土山雨が降る
 難波入江の身は捨小舟、岸にはなれてたよりなや
 琉球へおじゃるふら草鞋穿ておじゃれ、琉球は石原小石原
 難波潟短かき蘆の節の間なりと、どうして逢はずに過されう
 箱根山、くもらばくもれ晴れたとて、花のお江戸は見えやせん

人 名

忠義一途のお初は世にも、主人もつ身のか、み山
 お七火に死におはつは刃、翌日は誰がうへ戀の果
 いざり勝五郎くるまに乘せて、ひくは初花箱根山
 妹脊山では可わいなおみは、男とられて殺されて
 賤の緒だまさくくり言いふて、ふかく入鹿の奥御殿
 わしが國で見たものは、昔や谷風いま伊達摸様、床しなつ
 かし宮城野しのぶ、うかれまいぞへ松島蟹、しよんがい

無季の部

無季の部

君は今ごろ駒下駄はいて、きみ いま こまげだ 聲も高尾のそゝりぶしこゑ たかを
 與作思へばてる日も曇る、よさくおも せきの小萬がなみだ雨こまん
 ゆふべツガ、降つたる雨は、あめ トラが涙が風強しなみた かぜつよ
 野暮な屈原泪羅にしづむ、やば くつげんべきら 私や笑くぼに身を投るわたし
 韓信が、かんしん 股をくぐるも時代と時節、また ふまれた草にも花が咲はな
 金時が、熊をふまへてまさかり持つて、きんとき 富士の裾野のかりくらやふじ すその
 義経 辨慶 渡邊の綱、よしつね べんけい わたなべ 唐の大將 あやまらせ、から たいしやう 神功皇后武じんぐうくわうごうたけ
 内の臣、うち しん 軍人 形よしあし粽、いくさじんぎやう 菖蒲刀やあやめ草ちまきしやうがたな

人

さらば面影はなれもやらで、さらば おもかげ 人のつらさにます鏡ひと
 限りある身にさりとは人の、かぎ 遠き行方を思へとやとほ
 人にもものいや油の雫、ひと 落ちてひろがる何處までもあぶら
 人の口には戸がたてられぬ、ひと 流れ川には堰ならぬなが
 人の事かと立寄聞けば、ひと きけば指名はわしがことたちよりき
 人が言ひますこなたの事を、ひと 梅や櫻のとりくにうめ さくら
 人を頼んでからぢやと言か、ひと 但しうち明話さうかたの

無季の部

無季の部

心

君は辛くも恨みはせまじ、心からなる身のうさを
 絶えてしなくばなく、人も、身をも恨みじ我心
 逢はでくもりし心の鏡、あふて霽さんうたがひを
 消えぬ心の半は雲に、かよふあらしをよすがにて
 はやるかんざし、髪形よりすくな心がうつくしい
 金がかたきで身は人のもの、心ばかりが主のもの
 私の心は萱ぶき屋根よ、かはらないのと察しやんせ

無季の部

思

行くも販るもしのぶの亂れ、限り知られぬ我思ひ
 まれに逢ふ夜は人目を忍び、語りつくさん我思ひ
 思ひ重ねてくるしや今は、逢はで命も絶えなまし
 さしも知らじな斯とは君に、包む思のもゆれども
 なませなま中慣ずば斯程、物は思はじさりとては
 物や思ふと問ふ人あらば、せめて語りや慰さまん
 忍ぶ心を色には出さじ、ものや思ふと問ふばかり

無季の部

まだき我名わがなの立ちたるとても、思おもひ初はじしを一ひとすぢ節せつに
 思おもひあまりて見まみえし夢ゆめよ、さめて涙なみだのほかぞなき
 あだな契ちぎりを結むすびて今は、我身わがみひとつの憂うれき思おもひ
 思おもひ餘あまりて折をり焚たく柴しばの、けむり淋さびしき夕ゆふまぐれ
 人目ひとめ忍しのべば其名そのなも言いはで、思おもふあたりのとどさく
 こなた思おもへば照てる日ひが曇くもる、冴さえた月つき夜よが闇やみとなる
 こなた思おもへば野のも春せも山やまも、藪やぶも林はやしも知しらでゆく
 思おもひ出たすとは忘わするゝ故からよ、思おもひ出たさぬよ忘わすれぬは

無季の部

こなた思おもへば千里せんりが一いち里り、逢あはず戻もどればまた千里せんり
 思おもひ念ねん力りき岩いはでもとほす、なんのそなたの一ひと重こへがさ
 ひとり寝ねる夜よの其その明あくる間まは、いかに久ひさしき物もの思おもひ
 こなた思おもふたらこれ程ほどをせた、二重ふたへ廻まはりが三重みへ廻まはる
 思おもひまはせば浮世うきよはかゞみ、笑わらひ顔がほすりや笑わらひ顔がほ
 思おもふまいぞと思おもふも思おもひ、なぞと思おもふもまた思おもひ
 主ぬしは今頃いまごろさめてか寝ねてか、思おもひ出たしてか忘わすれてか
 人ひとしれず、思おもひ初はじしがもう兎とやかうと、浮名うきな立たつてはなほ止やめぬ

無季の部

殿(様)

思ふ殿御が野邊ござるなら、涼し風吹け雨降るな
 あれに見えるが殿御の館、煙立つのがなつかしい
 殿を持つなら村一ばんの、大鼓たゝきか笛ふきか
 殿と寝るかや五千石とるか、何の五千石殿と寝る
 眞の闇にも迷はぬ我を、あゝさて其様の迷はする
 様よく／＼とこがれて來たに、様は啞かよ物言はぬ
 縹子の袴の襷積取るよりも、様の機嫌の取悪くさ

戀

雲の旗手の其方を戀て、住めば住む身ぞ味氣なき
 憂しや此の身は親はらからの、爲に沈みし戀の淵
 忍ぶ戀路もついで色に出で、ものや思ふと人が言ふ
 戀路ヤせきやるな浮世は車、命長けりや廻りあふ
 人も斯らかと身に引きくらべ、涙もろいも戀の情
 玉の言葉を錦に織つて、つゞりあげたる戀ごるも
 戀といふ字をぶんせきすれば、糸し糸しと言ふ心

無季の部

無季の部

程のありとは戀路ぢやないぞ、近き遠きは言ぬ事
 昔や馬道今くるまみち、かよひくるわの戀のみち
 憂しと見し世もけふ日になつて、見ば戀しい事計
 としも十五の満月むすめ、やがて覺える戀のやみ
 ほんに思へば昨日今日、月日立つのも上の空、人の譏りも世の
 義理も、思はぬ戀の三ツ瀬川、逢はぬ其の日は氣にかゝる、逢
 へば口舌の種となる、憎らしい程可愛うて、エ、妾が心は何
 んじややら

夢

夢になりとも情はよいが、人の辛さを聞くもいや
 逢で寝る夜は袖ひぢまさる、夢は枕のいとまなや
 夢になりとも逢せてたもれ、夢に浮名は立ヤせまい
 逢た夢見て笑ふてさめて、あたり見まはし涙ぐむ
 逢と見し、夢は空しく覺て又、辛き現の闇の内、思て見て
 もふさいでも、眞に心の遣方もなや、どうせ逢れぬ浮世なら、
 深山の奥の其奥の、すつとの奥に住居して、人目思て物思たや

無季の部

無季の部

火 (悵氣)

心細くももしび更けて、まつは命の消えもせず
 衛士の焚く火は夜こそ燃れ、胸に焚く火の絶やらぬ
 西のひさしに燈火きつて、されぬるにしのもの語
 胸で苦しき火は焚くけれど、烟たゝねば人知らぬ
 平家の一門皆蟹となる、わたしや悵氣で鬼となる
 淀の車は水ゆるゑ廻る、わたしや悵氣で氣が廻る、眞にやる瀬が
 ないわいな、實々道る瀬がないわいな

涙

花におく露小ざさのあられ、こぼれやすきは我涙
 逢ふも別れもみないとによる、涙貫けかたみにも
 人の満干のこゝろも知らで、底なげなる我なみだ
 なみだならでは哀れを問はじ、深き思ひの袖の色
 しのふ袂のいろ見えそめて、心にも似ぬ我なみだ
 袖の湊の寄る瀬を知らば、うれしかるべき涙かは
 胸の焔は吐息となつて、曇りはなみだの雨となる

無季の部

無季の部

別

今は身に知る愛別離苦の、憂を思へばなかくに
 別れぬる夜のつらさを問はゞ、後の朝の文ばかり
 あはぬつらさを焦れしよりは、逢ふて別るゝ浮涙
 様よアレ見よアノ雲行を、様とわかれもアノ如く
 逢ふた嬉しさ別れの辛さ、あはぬ昔がましきいな
 逢ふて嬉しや別が辛い、逢ふて別かなけにやよい
 きみと別れて松原行けば、松の露やらなみだやら

命

問はゞ問へかし此夕暮を、あすの命も知らぬまに
 最早命も絶えなば絶えよ、住めば恨めし同じ世に
 身をば何せんちかひし人の、命のみこそ惜まるれ

髪

千代の前髪おろさばおろせ、私もとめましヨ振袖を
 忍ぶもじずりそりや誰ゆるに、亂れて冷たい洗髪
 心中しましヨか髪切ましヨか、髪は生物身は大事

無季の部

無季の部

寫眞

口でけなして心でほめて、人目しのんで見る寫眞

寢顔

燐寸の明りで、顔寢をながめ、吸付煙草のひとり笑
寢顔覗いてニツコリ笑ひ、主によく似て可愛らし

旅

幾重かさなる山川なりと、こゝろへだつなたび衣
唐衣きつゝなれにし妻をば捨て、馬鹿らしいぞへ旅の空

移香

ゆふべくのその移香は、キミが袂のゆかりとも
のこる移香枕にそひて、いとどわすれぬ閨のうち

文

文は數多に書くともまよよ、思ひそめしは唯一人
文は遣りたし書く手は持ず、やるぞ白紙文と讀め
硯ひき寄せ寫眞をながめ、落つる涙でふみを書く
反古にすまいと誓ふた文も、知りつゝ破つて枕紙

無季の部

無季の部

絲

いとをとるならむらなくほそく、可愛男の夏羽織
 君は絲繰る車はまはる、わたし恪氣で氣がまはる
 お前と一生暮すなら、深山の奥のわび住居、縫針仕事絲車、
 細谷川の布さらし、柴刈る手業もいとやせぬ
 むらさきの、結び目堅き縁の絲、解けぬも色の深翠り、まつに來
 ぬ夜は筆の先、怨みかされし命毛も、硯の海へはまるほど、深い
 浅いは客と情夫、くろうするの男故

鳥

鳥も通はぬ深山のおくも、住めば都ぢやのよ殿よ
 思ひ直して又來ておくれ、鳥も枯木に二度とまる
 山が焼るが立ぬか雉子よ、之が立りヨか子を置いて
 雉子野に住む、雲雀はやまに、鶉粟穂につま思ひ
 鮎は瀬に住む鳥や木の枝に、人は情愛の下に住む
 池の子鮎に心をくれて、たちやかねたりしら鷺よ
 三千世界のからすを殺し、主と朝寝がして見たい

無季の部

無季の部

峯みねのこ小まつにひなづる雛鶴つがひ、たに谷のながれにかめ龜あそぶ
 しんの話はなしもまだせぬうちに、憎にくや鴉からすがつげわたる
 鳥とりが飛とぶくく三みつ四よつ五いつつ、旅たびはさびしき暮くれの空そら
 今いまは亂みだれてうき山鳥やまどりの、長ながきつらさのおもはるゝ
 足あしびきの、山やまどりの尾おの長なが々し夜よを、どうして一人ひとりで寝ねつかれう
 逢あはぬ夜よは、宵よひの騒さわぎで紛まぎれて居ゐれど、更よけて遠音とほねの三味線さんみせんを、聞き
 くに淋さびしき一人ひとり寝ねの、夢ゆめにおどろく足音あしおとは、もしや夫それかと胸騒むねさわ
 ぎ、エ、マア辛氣しんきな按摩あんまさん、憎にくまれ口ぐちな明鳥あけがらす

無季の部

磯いその松まつが根波ねなみうちかけて、立たつなわりなき戀こひの淵ふち
 岩いばに唐松からまつぬいろとすれば、磯いその小波こなみがゆりおこす
 めでたくの若松わかまつさまよ、枝えだもさかえる葉はも茂しゆる
 目出度めでたくが三みつ重かさなれば、庭にはに鶴龜つるかめ五葉ごようのまつ
 松まつといふ字じは開化かいくわの文字もじよ、當世たうせばやりの公きみと木ぼく
 松まつの根元ねもとへくるみを植うゑて、松まつ(待まちつ)よりくるみ(來身くそみ)は辛つらいもの
 紺こんの前垂まへたれまつ葉はを染そめて、松まつ(待まちつ)に紺こん(來こん)とはよく染そめた

無季の部

竹

竹にふしある浮世はいやよ、人の檻がき結たがる
竹に雀はしなよくとまる、とめてとまらぬ戀の道
竹の切口たまりし水は、澄まず濁らず出ず入らず
笛に育てし雄竹に雌竹、早くふうふとならせたい

花

花のあけぼの夕べの秋も、くらべぐるしき我が心
誰が折るだる眺めるだるう、仇に散のか野邊の花

無季の部

咲いて萎れて又咲く花は、優曇華のはな木瓜の花
嶺の櫻に谷間の紅葉、おかほ見ながらまゝならぬ
山に咲く花あらしが毒よ、わしは君さま見るが毒
たとひ百日見ないかとても、梅は櫻になりはせぬ
花はいろく五色に咲ど、主に見かへる花はない
さくら三月、あやめは五月、咲いて年とるうめの花
花に逢初月夜に焦れ、雪にやまつ身の目もあはず
下へくと枯木をながす、ながす枯木に花が咲く

無季の部

立てば芍薬しやくやく、すわれれば牡丹ぼたん、あゆむ姿すがたが百合ゆりのはな
芽めを出したヤ切取りきりとり、花咲はなさきヤ挟はさむ眞まことに邪見じやけんな花鉄子はなばさみ

草

戀こひの山吹やまぶき、なさけのあやめ、秋あきのかれ草くさしをれぐさ
蘆あしのかり寝ねの一夜ひとよなりと、逢あふて話はなしがして見みたい
浮草うきぐさの、けふはむかふの岸邊きしべに咲さいて、日々ひびの心こころとあすか川がは
草くさも寝ねしづむ夜よもすがら、枕まくら一つに寝ねもやらず、起おきも直なほらずま
た片思かたおもひ、逢あは先さきなら知しらて濟すむ、心こころばかりがエ、罪つみの元もと

滑稽

風かぜが笛吹ふえふきヤ木この葉はが躍をどる、狸たぬきうかれて腹はらつゞみ
西にしの山見やまみよ跛者ちんぱがとほる、笠かさが見みえたり隠かくれたり
男持をとこもつなら跛者ちんぱを持もちやれ、跛者ちんぱ踊をどる様ようで面白おもしろい
男持をとこもつなら片目かためを持もちやれ、視見のぞきみる時手ときてがいらぬ
まゝにならぬと御櫃おひつを投なげて、其處邊そこらあたりはまゝだらけ
思切おもひきれとて五合ごご榊ま投なげた、之これが一生いっせう(一升)の別わかれます
夢ゆめで戸とたたく現うつらであける、そこで狐きつねがコンとなく

無季の部

無季の部

鬼おにが餅もち搗うきや閻魔えんまが控こる、側そばで御地藏おんじぞうが嘗なたがる
 内うちの姉あねさん粉こなを引ひや眠ねる、團子だんご喰くふ時ときや眼めが光ひかる
 あの子こよい子こぢや牡丹餅ぼたんもち娘むすめ黄粉きんこなつけたら尙なほよかる
 坊ばさん頭あたまへ飯粒まゝつぶつけて、章魚たこの丸まる酢すしよく出で來きた
 寺てらの門かど口ぐち蜂はちが巢すを懸かけて、坊主ぼうず出でりや螫さす這入はいりや螫さす
 千部せんぶ萬部ばんぶの經文きやうもんよりも、わたしや一歩いっぽの金かねがよい
 お粗末そまつなれども妾めかけの男をとこ、どうも人ひとにはかしくい
 論語ろんご讀よむ廊くわに通かよふ、女郎ぢやうらうも格子かろうし(孔子こうし)の内うちぢやもの

雜

西にしへ西にしへと月つき日ひも星ほしも、さぞや東ひがしはくらかろ
 さても寢ねられぬ曉あかつき憂うれしや、過すぎし今宵こよひのしかも今いま
 よしや嘆なげかじ叶かなはぬとても、定さだめなきこそ浮世うきよなれ
 たつる錦木にしきぎかひなく朽くちて、添そはで年とし經ふる身みぞつらき
 まよ田舎ゐなかがまだ住すよかる、主ぬしと二人ふたりで暮くらすなら
 海士あまの焚たくなる藻鹽もしほの烟けむり、人ひとの立居たちゐのしほとなる
 掛かけてよいのは衣桁いかうに小袖こそで、掛かけてたもるな薄うすなさけ

無季の部

無季の部

來たら寄なよ、立聞止しな、寄ば茶も煮る菓子も出す
踊をどるなら品よくをどれ、品のよいのを嫁に取る
かたい約束あてにはするな、岩は碎れて砂利になる
唄へ〜と急ぎ立てられて、唄も出ませぬ汗が出る
たつは蠟燭たゝぬは年期、おなじ流れの身だけけれど
惚ちや居れども言出しにくひ、何か先から言ばよい
立田川邊に船とめて、まだうら若き娘氣の、何う言うてよかるや
ら、辛氣枕の空寢入り

無季の部

思ふ心のいつはりなきは、虎と見る箭の石にたつ
石に立つ箭のありとは聞けど、なぜに届かぬ我思
逢て立名が立名の内か、逢はで立つこそ立名なれ
斯と知らさで消行くならば、辛き報のありやせん
紺の服紗に鬢伽羅こめて、おとす振して君にやる
染めて悔しや藍紫に、元の白地がましぢやもの
初手はじやうだん、中頃義理で、今ぢや互の實と實
嘘も實も賣る身のつとめ、そこで相手の上手下手

無季の部

いやで幸さいはすひ好すかれちこま困こまる、外ほかによいのがある私わたし
 としは二八にはちのまだ若水わかみづで、人ひとのなさけも涙なみかねる
 昔思むかしおもへばうらめしゆござる、なぜに昔むかしは今いまないぞ
 賤しづのをだままたくさ又かへ繰かへり返かへし、どうぞ昔むかしにしてほしい
 逢あねば逢あねで苦く勞らうもするが、逢あへば逢あたで又またく苦く勞らう
 更よけて逢あふ夜よの氣き苦く勞らうは、人ひと目めをかれて格かく子し先さき、互たがひに見みかはす
 顔かほと顔かほ、眼めに持もつ涙なみ袖そでぬれて、エ、意い地ぢわるな火ひの用よう心じんはなす
 話はなしも後あとや先さき

無季の部

可愛かあいがられて又また憎にくまれて、可愛かあいがられた甲か斐ひもない
 泣ないて悔くんで帶おび買かうて貫もうて、質しちに置おけて流ながされた
 諦あきらめましたよどう諦あきらめた、諦あきらめられぬとあきらめた
 時ときは世よにつれ世よは時ときにつれ、今いまの若わかい衆しうは鼻かをつれ
 四し十じゆは女をんなのささかり、三さん十じゆ九くぢやもの花はなぢやもの
 お前まへ百ひやくまで私わしや九く十じゆ九く迄まで、ともに白しろ髪がのはへるまで
 お前まへ一ひ人ひとりか連つれ衆しゆはないか、連つれ衆しゆあとから駕か籠こでくる
 山さん椒しよ胡こ椒しよより辛からい物ものは世よ帯たい、ならぬ世よ帯たいは向なからい

無の季部

無理を言のが私の無理か、無理を言はせる主が無理
 いやなお方の親切よりも、好きなお方の無理がよい
 夫たがやす娘はかせぐ、つまは背戸へ出て米かしく
 羽織ぬぎ捨て筒袖巻いて、百姓するのもくにのため
 草鞋切れても粗末にするな、藁はお米の親ぢやもの
 逢ひたさに、用無き門を幾度か、通れど出て来ぬ性根なら、矢張
 女房が怖いのか、然りとはお前は二心、エ、妾は氣が揉る、マア
 何うせうぞいな

無の季部

裸體ぢや行れぬ着て行しやんせ、背戸の木小屋に菰がある
 飲めよ騒げよ今宵の御酒よ、あすは出船の風を待つ
 飲みやれ歌やれささの世は闇よ、今はなかばの花盛
 飲みやれ大黒歌やれ恵比壽、ことにお酌は福のかみ
 腹が立つ時や茶碗で酒を、飲んで暫く寝りやなほる
 お婆何處へ行く三升樽提げて、嫁の在所へ孫抱さに
 馬がよければ馬方までも、馬がいさめばいそくと
 馬方船頭は乞食におとる、乞食や夜る寝て晝かせぐ

無季の部

桶屋さんより木挽さんが悪い、中のよい木を引分る
木挽さんかよ懐かしゆござる、妾の殿御も木挽さん
今夜曰ひき遊にござれ、曰が重いかといふてござれ

新詩的俗謠(完)

附 録 俗 謠 研 究 の 葉

意 想 外 史 述

俗 謠 の 起 原

七七七五の詩形を以て成立つて居る二十六字詩、之を今日では殆んど一般に都々一だの又は情歌だのと呼び做して居るのであるが夫れでは何だか語弊がある様に思はれ、矢張俗謠若くは俚謠といつた方がよろしい様である

サテ此の詩形は何時頃出来たものであらうか、何れの時代に其の萌芽を現はしたのであらうか、即ち俗謠の起原如何といふ問題、

俗謠の起原

俗謠の起原

之に對して明確なる答解を與へることは頗る困難な業で、諸書を参照して見ると實に異説紛々徒らに疑惑を増すのみで容易に解案を得ることが出来ぬ。衆の略一致する所は求め得ても、猶ほ種々の疑問が續出して來る。穿鑿を始めると殆んど限りがない。で自分には次の様に言つて置いたら何うかと思ふ

俗謠二十六字詩の眞の起原は今日之を明かにし難いけれども、近古小唄の祖として知られて居る彼の自庵と號した堺の隆達和尚が自作の歌に一種の曲節を附し、隆達節といふのを創めた。其の隆達節の中に、往々二十六字の詩形が用ゐてあるのを以て見れば、縦し其の源流を此に求め得ないまでも、最も遠き支流として之を許すことが出来よう。兎に角此の詩形の存在を明かにし得るのは、天正文祿(今を距る事二百餘年前)の頃であると

俗 謠 の 變 遷

既に上にも述べた如く、俗謠の眞の起原は之を明かにし難いとすれば、其の變遷を説くに當りても、之が起點を何れに置いてよろしいかといふ疑問がある。が之も己むを得ず隆達節から始める事にしてしよう。隆達和尚は堺の日蓮宗顯本寺の僧侶であつたのが、何うした譯か、詳しい傳記がないから分らぬが何か面黒い小説的な譯があつたものと見え、遂に還俗して藥種屋高三氏の家に入り賈人となつた。自庵と號して歌は自作、手跡は立派、聲も好いと來て居る上に、拍子もなか／＼氣の利いたもので、大に諸人の持て囃す所となり一流の祖として仰がるゝに至つたと聲曲類纂(弘化四年板)に記

俗謠の變遷

俗謡の遷變

されてある。隆達が生死の年月は固より不明であるが、天正、文祿、慶長年間の人であることは、隆達自筆の小唄本の巻跋に文祿二年八月日自庵隆と記してあるのを以ても知られる。隆達節の中に二十六字の詩形が用ゐてあるのは、松の葉(元録十
六年板)に隆達節として、

◎夢ゆめになりとも情なさけはよいが、人ひとのつらさを聞きくもいや

といふのが載せてあるので相像がつく。尙ほ同書には本手組、端手組の唄として次の様なのが載せてある

◎吹ふげよ松風まつかぜあがれやすだれ、いまの小唄こ唄の主見ぬしみたや

◎眞しんの闇やみにもまよはぬわれを、あゝさて其様そさまのまよはせる

本手組、端(又は破)手組といふのは虎澤檢校や澤住(又は角)檢校の輩が其の節譜を作つたものとして知られ、其の時代も殆んど隆達と同時代であつて見れば之に就いても疑はしい點が數々ある。又鹿兒島節として、

◎志賀しがのさい浪立なみたつともまよ、霞かすみがくれの舟ふねゆかし

といふのがあり薩摩節としては、

◎お江戸えごで出てから戸塚とつかはとまり、駒こまをはやめて藤澤ふぢざはへ

◎親おやは他國たぐくに子は島原しまばらに、櫻花さくらばなかや散ちりくくに

といふ様なのが載せてある。

其他、甫喜山景雄氏の我自刊我本には諸國盆踊唱歌として、

俗謡の遷變

俗謡の變遷

◎様よあれ見よあの雲行を、さまと別れもあの如く

◎鳥も通はぬ深山の奥も住めば都ぢやのふ殿よ

◎月は東にすわるは西にいとし殿御はまん中に

◎舟がつくく二百二十七そう様がござるがあの中なに

の類が載せてあり、何れも寛永(今を距ること二)以前の唱歌とせられて居る。して見ると此等の唱歌は誰が作つたもので、如何なる所に其の系統を引いて居るのであるか、疑問徒らに起り來るのみで、之を解決し得る材料が淺學不才なる自分には容易に見つからぬのである。

次に臆氣ながらも其の歴史的變遷を辿り得るのは、慶長の頃、江

戸に雲井弄(又は)齋といふ坊さんがあつて、性來小唄を好む所から隆達節を愛翫してなか／＼巧みなものであつたのが、後には一派をなして弄齋節といふのを案出し、大に世に持て囃されたといふ事である。して其の弄齋節の唱歌として傳つて居るのは、

◎よしや今宵は曇らば曇れ、とても涙で見月を

◎住めば浮世に思ひの増すに、月と入らばや山の端に

◎なげきなる世も月日を送る、さても命はあるものか

といふ様なので、之も松の葉に載せてある。

其の次には、貞享元祿の頃京都から起つて廣く三都に行はれた投節といふのがある。之は弄齋節が變じたものとされて居る。京都

俗謡の變遷

俗謠の變遷

島原の投節といへば江戸吉原の繼節大坂新町の籬節と共に當時音曲の三名物と言はれた程で、花柳界に於ける勢力は實に素晴らしきものであつたらしい。今其の中の二三を挙げると、

◎更けて 砧の音より聞けば、月に落ちくる我涙

◎こころくの世の中なれや、花のうてなの露のいる

◎月は人目の關路もなしや、西に流るゝ夜半の空

◎泣いて寝顔のなかばは雲に、見えてこぼるゝ袖の月

といふ様な調子で、弄齋節などと共に和歌の如き優麗典雅なる趣致に富んで居る

投節の次には潮來節といふのが、常州行方郡の潮來村から勃興し

來つて、江戸の俗曲界に大勢力を占むるに至つた、之は文化以前即ち今より凡そ百年程昔に流行したものである。俗謠も潮來節に至つて餘程調子が亂れ、ともすれば淫靡の趣きを表はす様になつた

◎月にむら雲そよ吸く風に、袖に櫻がちらくと

◎ちらりくと降る雪さへも、積りくとふかくなる

◎しんの話もまだせぬうちに、にくや鴉のつげわたる

◎逢ふた夢見て笑うてさめて、あたり見まはし涙ぐむ

右に挙げたのは、其の中の最も優秀なるもの且つ厭味のないものであるが、夫れでも彼れ是れ比較して見ると稍卑猥の鋒芒があらはれて居る。

俗謠の變遷

俗謠の分類

此の潮來節が衰へて其の次に一大流行を來たしたのが今の都々一
 て、之は天保年間常州水戸の落語家、初代都々一坊扇歌と號する
 人が、席亭などで盛んに唸り出したのに創まつて居る。其の當時
 から追々と亂調子に成つて、逆も士君子の耳には入れられない様
 なものに成つて仕舞つた。俗謠の變遷は實に斯の如くして、世を
 追ひ時を重ねるに従つて、次第々々に面白からぬものとなつたの
 は眞に浩歎すべきではあるまいか

俗 謠 の 分 類

俗謠を分類するに就いては、從來種々の分類法が試みられた。形
 式の上からしたのもあれば、内容の上からしたのもある。何れに

しても其の成功は左程十分ではないらしい
 岸上蜃氣樓主人は正體、尻取、天地、折句、贈答、典故、文句入
 翻譯、名所、地口、滑稽、字餘の十二に分類し、石橋思案外史
 は先づ正體、變體、の二つに大別し、更に之を小分して、正體を
 本格(七七七五の純二十六字式)と偏格とに、偏格を五字冠(五七七七五の三
 十一字式)と字餘とに分ち
 變體を文句入と折句と尻取と天地と滑稽とに五小分し、其の内
 尻取を伊呂波順と同逆順とに、天地を一首に就て天地が同音なる
 ものと、何首か纏めて天地が一語或は一文章をなすものとの、滑
 滑を純滑稽と地口其の他のものとの、各々小分して居られる。實
 に精細を極めた分類である。終りの滑稽丈が内容上の分類法に依

俗謠の分類

俗謡の分類

つたもので、其他は皆形式上の分類である。其他普通に用ゐられて居る分類には春夏秋冬の四季及び雑の五部に大別したものの、又は伊呂波順に小分したものがあつたもの等がある。之には一首の頭字に依つたものと主題の頭字に依つたものがあるが、何れにしても伊呂波分けにするのは無意味なことであらう様に思はれる。

編者が本書に試みたのは、俳句の分類法に倣うて春夏秋冬及び無季の五部に大別し、更に之を一首々々の主題に依つて小分して見たのであるが、其の成功は自ら恐入る程の不結果に終つたのである。併し今後俗謡に大なる趣味を持つて居る人が内容上に將た形式上に十分なる注意を拂うて改良進歩を企てたならば今一段の見

るべきものが出来るに相違ない。編者の希望は偏へに將來を楽しまんとするにある。

俗 謡 の 作 法

先づ最初に講究して置かねばならぬ問題は如何なる形式を擇ぶべきかといふ事で、二十六字式か三十一字式か夫れとも字餘か文句入か折句か尻取か天地か滑稽か、何れを擇べばよいかといふ事から決めてかゝらねばならぬ。之に就ては十人十色人様々の意見もあらうなれど、自分は普通二十六字式を用ゆる事にして置いて、其他のものは臨機應變の處置位などにして、殊更之を作つて見ようなど、大膽な企てをするにも及ぶまいと思ふ。其の理由は今更喋

俗謡の作法

俗謠の作法

喋を要するまでもなく、古來幾多の人士が既に企て、見て其の多くが不成功に了つて居るのに鑑みればわかる。特に三十一字式の如きは其の位置を短歌に譲つてもよいではないか。次に内容と形式と何れを主とすべきかといふ事も一の重大なる問題で、之に就ては随分極端な思い切つた意見を懷いて居る人もあるやうであるが、自分は多少の傾向は已むを得ぬととして努めて一方を重んずる様にするのは餘り面白くない事であらうと思ふ。内容美と形式美と共に完全でなくては立派な詩として許すことは出来まい。美しき感情を表象すると共に之を妙なる五音律呂の上にあらはし示さうといふのが俗謠の俗謠たる特長であるとするれば尙更のこと兩方面共に重きを置かなくてはならぬ。

内容美は俗謠の精神で、形式美は其の容姿である。で、姿形に艶なる所を見せ、心想に情を籠めるといふことが俗謠を作る者の最も注意を拂ふべき點で、其の用語は最も通俗なるものを選び、眼で見るともななく聞いた耳で直ぐと合點の行くやうなのでなくてはならぬ。

俗謠を作るに當つて心得置くべき要件は凡そ以上に述べた位なもので、物々しく述べ立てる程の八ヶ間敷い規則といふ様なものがなく、至極お手輕に造作なく作つて見ることの出来るのが俗謠作法の特長ともいふべきである。併し全然規則のないものと思ひ、無暗矢鱈に作り得る様に考へるのは甚だよろしくない。早い話が思想交換の要具としての言語、日常普通の談話に於ても既に一定

俗謠の作法

俗謠の批評

の法則があり、其の法則を外にしては自己の思想感情を表はすことが出来ぬではないか。況してや韻あり律あるべき詩としての俗謠に於てをやだ。俗謠として特別に數へ立てる程の物々しい法則こそないにしても、和歌や俳句にいふ普通の法則位は心得て居らねばなるまい。今茲に其の概要丈でも述べて見たいのであるが、豫定の紙數に限りがあるから残念ながら省略する。尙ほ作例をも示す積りであつたが之も同様、他日の機會を待つことにしよう

俗謠の批評

凡そ批評には破壊的方面と構成的方面とがある。即ち短所を指摘して長所を發揮し、除くべきを除いて補ふべきを補ふのが批評の

批評たる本旨である。で今も此の見地に立つて俗謠の批評を試みて見ようと思ふ

物皆長あり短あるもので、俗謠も亦之を免れぬのであるが、短俄に補ふ可らず長俄に揚ぐ可らず、這般の手加減は餘程注意しなくてはならぬ。鳧脛短しと雖之を續がば則ち憂へん、鶴脛長しと雖之を斷たば則ち悲まん位のことは心得て居る必要がある

俗謠の長所は一言にして之を掩へば、内容形式共に何處までも通俗的で眼に親まんよりも耳に狎れ易く、寧ろ所謂文學に遠くして却つて音樂に近いといふにあるであらう。で、其の短所はと云へば、通俗が卑俗に流れて遂には姪靡となり、耳に狎れて音樂に近づくの結果、其の調子が次第に亂れて鼓膜に與へる刺戟の強度を漸

俗謠の批評

次に増さしむる様な傾向が見えるといふにあるであらう。俗謠を呼ぶに情歌の稱を以てし、俗謠は人情美のみを謠ふべきものゝ様に考へて居る人も随分あるやうであるが之は一を見て未だ二を知らざるもので、古來俗謠に依て自然美の謠はれて居るのは其の例に乏しくない。且つ俗謠は自然の野趣を謠ふに於て他のものゝ企て得ない程の長所を有して居る。夫れのみでなく自然美と人情美とを兼ね有する點に於ても殆んど和歌の優美と俳句の簡雅とを調和し得たかと思はしむる程の特長を備へて居る。既に豫定の紙數に達して居るが爲め、今茲に一々例證を擧げて細評を試み得ないのは如何にも遺憾なる極みであるが、俗謠に興味を有する人は本書に選び載せた所のものを仔細に點檢して直ちに了解せらるゝてあらう。

俗謠は俗なりと雖之を卑俗に流れしめず、其の謠ふに適せりと雖之が文學的價値を失はしめず、内容に苦心し形式に工夫し用語に注意したならば、之を平民文學として發達せしめ、民俗詩として進歩せしむること敢て難くはあるまいと思ふ。故に編者の切に望む所は、本書の讀者中に眞面目なる俗謠の研究者を得んとするにあるのである。

附 錄
俗 謠 研 究 の 葉 (完)

明治三十八年八月卅一日印刷
明治三十八年九月三日發行

【定價金二十錢】

不許
複製

發行所

（東京市本郷區
彌生町三番地）
（東京市神田區表
神保町十番地）

東言
西文
社社

編輯者 意想外史

發行者 內田正義

印刷者 遠藤銓吉

印刷所 東京市京橋區岡崎町三丁目廿五番地
六舍

